

### 3 環境情報の収集・発信

センターは、県民に環境意識の向上や環境保全活動を支援するため、環境学習情報のほか、試験研究情報、国際貢献情報など様々な情報をホームページで提供している。センターでは、ホームページを情報発信の重要なツールの一つとして捉え、より効果的に情報発信を行うための整備を行っている。

また、新聞による環境情報の発信や、センターの活動を広く知ってもらうためにニュースレターを発行した。

HPアドレス <http://www.pref.saitama.lg.jp/cess/index.html> [平成26年度アクセス件数148,648件 前年度比10.8%増]

#### 3.1 ホームページのコンテンツ

県ホームページのリニューアルに伴い、デザインやコンテンツの見直しを行い、平成26年12月25日から新ホームページを公開した。

##### (1) グローバルナビゲーション

トップページ上段に、以下の4つの大分類を設け、サイト構成をわかりやすく整理した。

###### ア センターについて

総長あいさつ、組織図、沿革、全景(航空写真)、パンフレットなどを掲載。

###### イ 施設紹介

施設紹介、ご利用案内、展示館、生態園、環境情報プラザ、研修室などを掲載。

###### ウ 試験研究の取組

試験研究の取組、研究課題、研究評価の取組、国際貢献、研究員紹介などを掲載。

###### エ 環境学習・情報

イベントのお知らせ、彩の国環境大学、身近な環境観察局、出前講座などを掲載。

##### (2) お知らせ

特に注目して欲しい情報を掲載。

##### (3) 新着情報

最新の更新情報を掲載。

##### (4) 環境学習・イベント情報

最新のイベント情報、社会科見学の案内など環境学習に関する情報を掲載。

##### (5) 研究所トピックス

ニュースレター、センター講演会など研究所に関する情報を掲載。

##### (6) お役立ちPickUp

イベント情報、ココが知りたい埼玉の環境、今月の里川などアクセスの多い情報を掲載。

##### (7) バナーリンク

刊行物、埼玉県地理環境情報WebGIS、生物多様性データベースなど。

#### 3.2 ニュースレターの発行

センターが行っている試験研究の内容や様々な講座、イベントなどの情報を県民の方々に広く情報提供するためのニュースレター(A4版)を平成26年度は4回発行し、25号からは読みやすさと内容の充実を図るため6ページとなった。なお、ニュースレターは、センターのホームページからも閲覧及びダウンロードができる。(トップページにバナー表示あり)

##### (1) 第23号(平成26年4月発行)

- ・「埼玉県環境科学国際センター講演会」を開催しました
- ・研究・事業紹介 「温暖化防止・低炭素・緊急時対応コベネフィット型高度浄化槽の研究開発」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(14) 「水銀」って空気中にもあるの? ・環境学習 ・イベント情報

##### (2) 第24号(平成26年7月発行)

- ・研究・事業紹介 「IPCC第5次評価報告書に採用された新たな方法に基づく埼玉県の気温上昇予測」  
「国際貢献事業:中国山西省の廃棄物処理を支援」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(15) 「暑さ指数」ってなに? ・環境学習 ・イベント情報

##### (3) 第25号(平成26年10月発行)

- ・研究・事業紹介 「堂平山観測所における二酸化炭素濃度の年平均値が観測開始後初めて400ppmを超過」  
「下水処理プロセスにおける温室効果ガス排出の調査」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(16) 「ネオニコチノイド系殺虫剤」ってなに?
- ・環境学習 ・イベント情報

##### (4) 第26号(平成27年1月発行)

- ・研究・事業紹介 「アスベスト含有成型板の迅速判定方法の開発」  
「環境放射能担当について」  
「第4回日中水環境技術交流会 in 杭州」
- ・ココが知りたい埼玉の環境(17) 家庭から「食品ロス」はどれくらい出ているの? どうやったら減らしていけるの?
- ・環境学習 ・イベント情報

### 3.3 センター講演会

当センターでは、広く県民に活動内容及び研究成果を紹介することにより、県民のセンターに対する理解と環境問題への関心を深めることを目的として「平成26年度環境科学国際センター講演会」を平成27年2月3日に埼玉会館（さいたま市浦和区）で開催した。「生物と人間社会」を統一テーマとして、国立環境研究所の五箇主席研究員が基調講演を行うとともに、センター研究員による研究成果・事例の発表及び研究活動紹介のポスター展示と解説を行い、環境問題への理解を深める機会とした。センター講演会の参加者は245名であった。

#### (1) 基調講演

##### 生物多様性異変と人間社会

一人間社会は如何に生物と付き合うべきか？ …………… 独立行政法人 国立環境研究所 主席研究員 五箇 公一

生物多様性とは、遺伝子の多様性から個体群・種の多様性、生態系の多様性に至るさまざまな階層での多様性を包括する概念をいう。生物多様性は、今からおよそ38億年前に地球上に生命が誕生して以来、脈々と続いてきた生物進化と絶滅の歴史の繰り返しのなかで誕生した。人類は先史時代の分布拡大に伴い、地球上の生物たちを次々に絶滅に追いやってきた。現在の地球上で起こっている生物種の絶滅速度は過去のいかなる絶滅よりも圧倒的に大きいとされる。現在の大絶滅では、熱帯林の奥地から極地の氷上に至るまで、地球上のいたる所に人間活動の影響が及び、新しい種を生み出すための遺伝子資源と進化のための時間が急速に奪われている。人間の経済発展を成功させ、維持するための土台は地球環境であり、それを支えているのは、多くの生物種である。人間は自らの幸福と発展のためにも、生物と共生して生きていかななくてはならない。今後、個人レベル、国家レベル、そして地球レベルで、これまでの消費型経済活動から、持続利用型の経済活動へとパラダイムの変換が求められる。

#### (2) センターの研究成果・事例紹介

##### ハウレンソウやコマツナの葉に発現するオゾン被害の軽減

－オゾンに強い品種の利用について－ …………… 自然環境担当 主任研究員 三輪 誠

大気汚染物質であるオゾンにより、本県の主要農作物で産出額も全国トップクラスであるハウレンソウやコマツナに被害が発生し、生産農家に経済的損失が生じている。そこで、このような被害を軽減するために、埼玉県農林総合研究センターと共同で、オゾンに強いハウレンソウやコマツナの品種を選抜するとともに、それを推測するための指標について検討した研究を紹介した。

##### 埼玉県における有機シリコン化合物の水環境モニタリング

－身近な化学物質の環境リスク－ …………… 化学物質担当 主任 堀井 勇一

建設、電機・電子機器、医療機器、パーソナルケア製品など幅広い産業分野で使われている化学物質の一つである有機シリコン化合物について、近年、環境や生態系への悪影響が懸念されている。しかし、水環境におけるこれらの物質の濃度分布は、国際的にもよく分かっていない。そこで、新たに水試料の分析法を開発するとともに、県内主要河川の水質調査及び環境リスク評価を行った研究について紹介した。

##### 生物に起因する河川の景観悪化現象

－その原因は油や塗料ではありません－ …………… 水環境担当 主任 池田 和弘

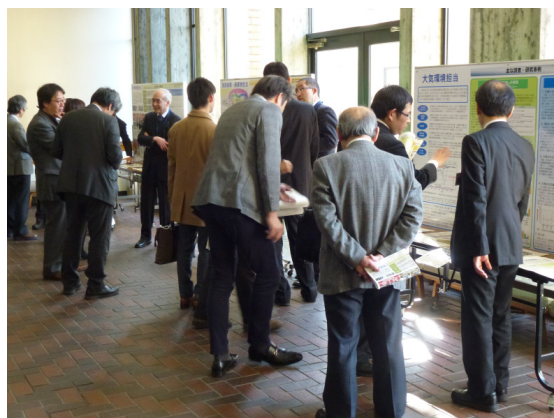
油や着色水の流下は、河川の景観を著しく悪化させ、時には有害物質を含んだりして、生態系や人の健康に影響を及ぼす可能性がある。油膜のように見えて油ではない、着色していても塗料のような化学物質は含まれていない、実はこれに似た現象を引き起こす犯人が実は生物だったという事例がある。このように環境の変化に反応する生物に起因する河川の景観悪化現象とその発生機構、そして環境影響についての研究を紹介した。

#### (3) センターの活動紹介

各担当がその活動概要を紹介するポスターを展示し、参加者に説明するとともに、質問に答えた。



基調講演



ポスター展示

### 3.4 環境情報の提供

#### (1) モニタリングデータの提供(CO<sub>2</sub>)

環境科学国際センターは、さいたま市(1991～2000年度)、堂平山(1992年度～)及び当センター(2000年度～)において、地球温暖化原因物質である大気中のCO<sub>2</sub>の濃度を観測してきた。測定に当たっては、世界気象機関標準ガスを基準としており、観測データについては、温室効果ガス世界資料センター(WDCGG)へ提供することにより、国連世界気象観測機構(WMO)の観測網を通して世界各地に供給した。平成21年10月からは、当センターの観測結果(速報値)をセンターホームページに掲載(自動更新)し、公開している。

#### (2) 環境情報の海外への発信

英語版ホームページに英文、中国語文のパンフレットを掲載するとともに、研究成果や研究員紹介などを掲載し、海外に向けた情報発信を行った。

### 3.5 マスコミ報道

センターの試験研究、環境学習等に関して記者発表を行ったほか、取材を受ける等の結果、以下のとおりマスコミによる報道があった。

#### (1) 新聞報道、広報誌掲載

(26回)

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
5月 3日 (土)	埼玉新聞	今世紀末最大4.8度上昇 県、将来の適応策検討へ	環境科学国際センターが埼玉県内の年平均気温が20世紀末に比べ2～4.8℃上昇することが予測されたと発表。県は温暖化緩和策だけではなく適応策の検討もはじめる。
5月 3日 (土)	朝日新聞	2080年代の熊谷…今の鹿児島より暑い!?	2080年代に県内の年間平均気温は4.8℃上がり、今の鹿児島県より高くなる可能性があるとして環境科学国際センターが発表した。県は今後、気象災害や農業被害の拡大が心配されるとして対策を進める。
5月 3日 (土)	日経新聞	今世紀末2～4.8度上昇、県平均気温、県などが算出	環境科学国際センターは、地球温暖化の影響で埼玉県の今世紀末の平均気温が20世紀末に比べ2～4.8℃上昇するとの見通しを発表。平均気温の変化を県ごとに算出する取り組みは長野県に次いで2番目。気温が上昇することを想定し、熱中症などの被害を最小化すべきだと警鐘を鳴らした。
5月 9日 (金)	埼玉新聞	カラス3羽が不審死(川越)	川越市の雑木林でカラス3羽が不審死しているのが見つかり、埼玉県環境科学国際センターが調査したところ、3羽全てから有機リン系の殺虫剤「EPN」が検出された。
5月14日 (水)	埼玉新聞	死んだドバトから殺虫剤の成分	川口市朝日の河川敷で、ドバト5羽が不審死しているのが見つかった。現場には穀類がまかれており、埼玉県環境科学国際センターが検査したところ、5羽のうち4羽と現場で回収した穀類からカーバイト系殺虫剤のメソミルが検出された。
5月14日 (水)	毎日新聞	ハト死骸から殺虫剤を検出	川口市朝日の新芝川河川敷で、ハト5羽の死骸が見つかり、近くに散らばっていた餌や胃の内容物からカーバイト系の殺虫剤を検出した。散らばっていたトウモロコシや麦に青い粉末が付いていたため、埼玉県環境科学国際センターで検査し、殺虫剤を検出した。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
5月14日 (水)	読売新聞	今世紀末 平均4.8度上昇、環境、農業への影響懸念	環境科学国際センターは、県内の平均気温が今世紀末には4.8℃上昇するという予測結果を発表した。同センターは「気温上昇は避けられず農業被害や災害などを最小限に食い止める対策を打ち出す必要がある」としている。
5月15日 (木)	読売新聞	PM2.5発生源を特定	第一線で活躍する若手・中堅研究者を紹介する記事「駆ける」で大気環境担当米持専門研究員が紹介された。PM2.5の日中韓同時観測やレアアースに着目した発生源解明などの取組が紹介された。
5月18日 (日)	東京新聞	気温、最大4.8度上昇、今世紀末県が試算	県内の平均気温が、現状以上の温暖化対策を施さなかった場合、今世紀末に最高で4.8℃上昇するとの試算を環境科学国際センターがまとめた。同センターは「ある程度の気温上昇を想定し、農業被害や熱中症、ゲリラ豪雨の対策を進める必要がある」としている。
5月18日 (日)	読売新聞 (全国版)	PM2.5日中韓で連携	PM2.5について日中韓の研究機関が連携して行っている共同観測について紹介された。これまで日中で行っていたPM2.5の共同観測に昨年韓国から韓国の大学が加わった。3カ国の研究機関が採取したサンプルを当センターで一括して分析し、情報の共有を図っている。
5月22日 (木)	毎日新聞	今世紀末県平均気温4.8度上昇 温室効果ガス現状のまま増えたら	IPCCが発表した最新の気候モデルに基づき、県は今世紀末の平均気温を試算。温室効果ガス排出量が現状のまま増え続けた場合、県平均気温は4.8℃上昇すると予想。今後の気温上昇を視野に農業被害対策等を強化する。
6月 1日 (日)	埼玉新聞	都会の川でアユ育て「練馬区～和光市～板橋区の白子川」	白子川は東京都練馬区の大泉井頭公園に水源の湧き水があり、和光市を通り東京都板橋区で新河岸川に注ぐ。2013年11月、東京湾から遡上した天然アユの産卵と、生まれた仔魚が確認された。県環境科学国際センター自然環境担当金澤光は、「東京湾につながる荒川や新河岸川の全ての支流にアユが上ってきている。川口市の芝川、戸田市の笹目川、さいたま市の鴨川もだ。」とコメント。
6月13日 (金)	埼玉新聞	CO2排出量5.1%増 25%削減目標 困難に	2012年度の県内の二酸化炭素濃度の総排出量が前年度比で5.1%増加したことが県環境科学国際センターの調査でわかった。家庭の電力消費量が増加していることから、県は県民の省エネ促進を図る。
6月25日 (水)	埼玉新聞	武甲山の希少種 県庁にミヤマスカシユリ展示	県内では秩父のシンボルといわれる武甲山の岩場だけに自生するミヤマスカシユリ(ユリ科)が、県庁の県民案内室で展示されている。ミヤマスカシユリは、県のレッドデータブックでは、ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種とされている。展示されている個体は、県環境科学国際センターで保護、増殖されたものである。
7月23日 (水)	埼玉新聞	東秩父観測所のCO2濃度年平均値400ppm超す	県と環境科学国際センターは東秩父村の堂平山観測所で観測した2013年の二酸化炭素濃度の年平均値が初めて400ppmを越したと発表した。同観測所は1993年から観測を始めたが、20年間で40.09ppm増加したことになる。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
7月27日 (日)	埼玉新聞	保全活動企業も応援 ムサシトミヨ生息地で草刈り	ユネスコプロジェクト未来遺産運動に登録されたムサシトミヨ生息地で支援企業のダンロップタイヤ関東支店の家族ら55人が草刈りを行った。午後からは県環境科学国際センターの金澤光がムサシトミヨの現状と課題について講演、「保護をより一層進めるため、国の天然記念物指定を目指したい」と話した。
8月 4日 (月)	静岡新聞	無人観測所研究者集う 夏「PM2.5、雷雨、観測 絶好ポイント」	現在「NPO法人富士山測候所を活用する会」の一員として実施しているPM2.5の富士山頂観測について、PM2.5を同時観測している韓国の研究者とともに5合目で取材を受けた。都市部の影響を受けずに長距離輸送されたPM2.5を採取するのに最適というコメントとともに掲載された。
8月19日 (火)	読売新聞	鶴ヶ島で115地点温度 測定、分布図作成「涼 む手段に」	鶴ヶ島市の市民団体が市内115地点で気温の一斉測定を実施する。水辺や緑地の有効性を確認する。測定データは環境科学国際センターが分析し、分布図を作成、参加者や希望者に配布する。
8月30日 (土)	埼玉新聞	川の浄化活動に関心 本庄の元小山川 比国 の市長が視察	フィリピン共和国ブトゥアン市の市長らが本庄市内の元小山川の浄化を視察した。本庄市の吉田市長は、県環境科学国際センターなどの協力で川と親しむイベントなども開催していると話した。
8月31日 (日)	読売新聞	アユ遡上調査 伝統の地引き網	川越市上戸の入間川で30日、アユの遡上調査を兼ねた地曳網体験が行われた。捕れた魚は僅かで、県環境科学国際センター金澤光・主任専門員が捕獲した魚について解説。この場所の下流に2つの魚道があり、遡上調査が続けられている。金澤は「市民とも協力し、順調に遡上出来るように工夫した手段を講じたい」とコメントした。
10月 5日 (日)	読売新聞	温暖化調査 市民が協 力	地方自治体が市民と一緒に地球温暖化の影響を調べる取り組みが各地で始まっている。環境科学国際センターではNPO法人バードリサーチと共同でツバメの飛来時期に関する調査を始めた。
11月 5日 (水)	環境新聞	地域社会における適応 策(2)埼玉県 適応策 の「主流化」が鍵	今や温室効果ガス排出量の削減を強力に進めたとしても一定の気温上昇は避けられず、温暖化の悪影響を最小化する適応策が今後重要となる。しかし現在、自治体では適応策への取り組みはほとんど行われていない。この適応策を自治体が進めるには、温暖化影響を前提に全ての施策を検討する「主流化」が重要である。
1月25日 (日)	産経新聞	胃から農薬検出 ムク ドリ5羽死ぬ	宮代町中島でムクドリ5羽が死んでいるのが見つかり、埼玉県環境科学国際センターで4羽を調べたところ、胃から殺虫剤イソキサチオンが検出された。
2月26日 (木)	読売新聞	ムサシトミヨの繁殖 熊谷で28日報告会	熊谷市の魚「ムサシトミヨ」の繁殖報告会が28日、市立商工会館で開かれる。熊谷市ムサシトミヨをまもる会が主催。当日は県環境科学国際センター金澤光が、「ムサシトミヨ生息地に侵入した外来甲殻類の現状について」と題して話すほか、繁殖に取り組んでいる同市立熊谷東中、佐谷田小、久下小の児童・生徒が各校の活動を発表する。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
3月11日 (水)	朝日新聞	県民実験教室 「ゴム動力自動車を作ろう～走れGO!GO!～」	3月29日(日)開催のイベントについて、開催日時、回数、会場、連絡先、申し込み方法等を紹介。
3月31日 (火)	埼玉新聞	県内全域に外来エビ 「生態系への影響懸念」	県内の荒川・利根川・中川水系などの多くの河川や沼などに外来種のカワリヌマエビ属が侵入し、在来種のヌマエビは駆逐される傾向にあることが、県環境科学国際センター自然環境担当主任専門員の金澤光の実地調査で分かった。金澤は生態系への影響を懸念して「未来の脅威として観察調査を続ける必要があり、各地の市民団体の力を借りたい。侵入を防ぐ法的措置も急務だ」とコメント。

(2)テレビ放映、ラジオ放送

(11回)

放送日	局名	番組名(タイトル)	内 容
5月14日(水)	NHK	NHK総合「くらし解説」 「暮らしの中で温暖化に備える」	自治体の中には身近な変化をとらえて対策に活かそうという動きが出始めている。その事例として、環境科学国際センターの温暖化影響モニタリングの結果を紹介。
5月22日(木)	テレビ埼玉	テレ玉イブニングニュース NEWS930	県環境科学国際センターは、今世紀末の県内の平均気温が20世紀末に比べて最大で4.8度上昇すると予測。県やセンターは気温上昇による農作物等への影響を軽減させる「適応策」の研究を進める。
5月29日(木)	テレビ埼玉	テレ玉イブニングニュース	道の駅庄和では毎年ツバメが来る事が出来る環境作りを進めている。ここを拠点に、NPO法人「バードリサーチ」と環境科学国際センターは、ツバメを守り、巣の数を増やす一方、施設を汚すフンの被害を少なくし、ツバメと共存する取り組みを進めている。
5月31日(土)	テレビ埼玉	彩の国ニュースほっと	「特集2」コーナーで環境科学国際センターが取り上げられ、PM2.5や光化学スモッグなどセンターの研究内容と環境学習施設「展示館」が紹介された。
7月16日(水)	FM NACK5	モーニングスクエア	8月23日から開講する「彩の国環境大学」受講生募集のお知らせ。
10月20日(月)	フジテレビ	スーパーニュース	10月19日に開催された北京国際マラソンが、視界が悪いほどPM2.5濃度が高い状況で行われたことについて、一般に考えられる影響や対応に関してコメントした。
11月12日(木)	FM NACK5	モーニングスクエア	11月14日に開催する県民の日特別企画のお知らせ。
12月20日(土)	テレビ埼玉	彩の国ニュースほっと	「Weekly Pick Up」コーナーで12月13日に開催された生態園体験教室「実りのリースづくり」の様子が取り上げられ、参加者たちの作品づくりに熱中する様子や完成後の感想などが放送された。
1月22日(木)	FM NACK5	モーニングスクエア	2月3日(火)に埼玉会館小ホールで開催される「環境科学国際センター講演会」の参加者募集のお知らせ。

放送日	局名	番組名(タイトル)	内 容
3月 5日(木)	TBSテレビ	いっぷく	中国のPM2.5動画に関して、中国の大気汚染、越境汚染に関してコメントした。
3月 6日(金)	テレビ朝日	グッドモーニング	中国のPM2.5動画に関して、中国の大気汚染、越境汚染に関してコメントした。